文学と人類学の親縁性

ツェラン・トンドゥプ邦訳作品集出版に寄せて

シンジルト
熊本大学／社会人類学・内陸アジア研究

❖同胞なる他者

ツェラン・トンドゥプさんと初めて会ったのは、私が中国西北部の蘭州市に位置する大学に進学した一九八〇年代だった。それは西北民族学院（二〇〇三年から「西北民族大学」に改名）という少数民族の出身者を育成するいわゆる民族系大学である。民族系とはいえ、大学の教授用言語はほとんど漢語だった。唯一、漢語以外の言語で教育が行われていたのが、「少数民族言語文学系」という学部だった。当学部には、それぞれモンゴル語とチベット語で授業を行う「モンゴル言語文学専攻」と「チベット言語文学専攻」の二つの専攻が設置されていた。この二つの専攻のいずれにも青海省から来たモンゴル人が所属していた。前者のモンゴル言語文学専攻に所属する彼らが話すモンゴル語は、当時の私にはよく聞き取れず、イントネーションなどはまるでチベット語そのものだった。他方、後者のチベット言語文学専攻にいる彼らの第一言語はそのままチベット語であり、モンゴル語は全く話せなかった。前者には主に青海省の海西モンゴル族チベット族自治州や海北チベット族自治州などの学生が所属し、後者にはツェラン・トンドゥプさんのような河南モンゴル族自治県（以下、河南蒙旗）から来た学生が多く在籍していた。河南蒙旗から来た学生は、肌色や服装などその外見においても、言葉や慣習などいわゆるその内面においてもチベット人と何ら変わらないのだ、というのが私の第一印象であった。

実際、河南蒙旗のモンゴル人たちが操るチベット語はアムド・チベット地域でもっともスタンダードなものだといわれており、河南蒙旗はツェラン・トンドゥプさんのようなチベット語の知的世界で活躍する文化人を数多く輩出してきた。一言でいえば、「チベット化」したモンゴル人である。漢化が進む内モンゴル自治区で育った私にとって、チベット語しか話せない河南蒙旗のモンゴル人は、民族的な同胞であると同時に文化的な他者でもある、という意味において新鮮でユニークな存在だった。

河南蒙旗の人間は、モンゴル語はできないものの、自分たちのことを、アムド・チベット語

【写真1】 道路を走る大型の石炭輸送車

でモンゴルを意味する「ソッゴ」という言葉で呼ぶ。このソッゴとしての民族的アイデンティティとはどのようなものなのか。答えを求めて、私は一九九五年以来、頻繁に河南蒙旗に赴き、断続的に調査を行ってきた。大学における彼らとの出会いは、私にとって奇妙な異文化経験になり、エスニシティとは何かという抽象的な問題について、河南蒙旗というフィールドで具体的に考えるようになった。今となって考えれば、彼らと出会った経験こそが、私をエスニシティ研究に向かわせ、やがて、文化人類学という学問へ導いてくれたといえよう。不自然な表現かもしれないが、彼らは私にとってまさに、同胞なる他者である。

❖旺盛な吸収力

大学時代の知り合いが多い中で、なぜか、河南蒙旗における調査でほぼ毎回会えるのは、河南蒙旗の役所で勤めながら創作活動をしていたツェラン・トンドゥプさんである。知り合ってから今日まで、数十年間、ツェラン・トンドゥプさんとの関係は常に安定的なものであった。その関係は、人類学者とインフォーマント、あるいは、調査者と被調査者という単純な図式

では到底説明できないものである。

彼はいつも小さい声で何かを語っている。声があまりにも小さく、聞き取れないことも多い。だが、彼が自分の周りを常に注意深く観察し、そして何かを考えているのは確かである。それは当然、狭義の文学に限るものではなく、いわばジャンルを問わず周りの新しいものに好奇心をもち、それらを最大限に自分の中に取り入れ、我が物にしようとするようなスタンスである。外部に対する彼の知的な関心の高さが実感できる。もう一つ強調すべきは、彼は、周りに対して常に関心をもちながらも、何事に対しても過剰反応しないという点である。周辺とかかわりながら、同時に一定の距離をもってそれを観察しているようなキャラクターの持ち主である。この二つの点において、彼の振る舞いは図らずも人類学的である。これは、単なる印象論ではなく、彼の作品にもみられる。

内モンゴル自治区あるいは日本という外部からやってくる私は、彼にとっても、同胞なる他者であろう。おそらくそれゆえに私のような存在でも、作家のツェラン・トンドゥプさんの創作世界において好材料になるのだろう。河南蒙旗における私や私の関係者のエピソードが原型となって、彼の初の長編小説に登場していることをのちに共通の友人から聞いた（『霧』香港天馬図書、二〇〇二年）。自分たちを調査する研究者まで自分の小説の素材にしてしまうほどの手際の良さである。このように、我々の関係の特徴は互いに相手を観察しあうところにあるといえるかもしれない。

ツェラン・トンドゥプさんは自らのWeChat（「微信」。日本のLINEに相当するもの）において、「黒狐の谷」を執筆する際に、インスピレーションを受け、参照した文献の一つは、拙編『中国環境政策報告：来自中日両国学者対中国生態環境的考察』（新吉楽図主編、内蒙古大学出版社、二〇〇五年）である、と回顧している。河南蒙旗においては厳密な意味での生態移民政策は実施されたことはないものの、環境保護などの名目で牧畜民の定住化が行われてきた。そこで、牧畜民の定住化を促すべく、多くのレンガ造りの固定家屋が建てられている。しかし、手抜き工事が後を絶たず、建物の質が悪いゆえに、入居予定の牧畜民からは敬遠されており、社会問題になっている。こうした問題は、「幸福生態移民村」の牧畜民が遭遇する問題として、「黒狐の谷」の中でリアルに提示されている。しかし、このようなリアルな描写は、拙編ではできなかった。

実在する生態移民村における経験や直接取材に基づく報告ではないという意味で、「黒狐の谷」は字義通りのルポルタージュあるいは報告文学ではないかもしれない。しかしながら、そこで言及されている事柄は進行中の社会的事実である。「黒狐の谷」の中で登場するのは、牧畜民の小型トラクターを轢きそうになる、黒い埃をまきあげながら往来する大型の石炭輸送車である。これは私も河南蒙旗の日常生活で頻繁に目撃した巨大な金属の塊であり、人間や動物はもとより普通の乗用車もなかなか近寄りがたい怪物のような存在である。これは地域社会にとっての外部を代表する異質な存在になる。ツェラン・トンドゥプさんのもうひとつの作品「河曲馬」のなかでは、この大型の石炭輸送車は、ついに主役であるタンナクという馬を轢き殺してしまったのである。（【写真1】）

私や私の関係者、私のかかわった書籍、そして、大型の石炭輸送車などこれら外部からくる諸要素は、彼にとって決してノイズとして排除すべきものではなく、むしろ現地社会の現実を構成している重要なファクターとして彼の作品の中に導入されていく。ツェラン・トンドゥプさんは、河南蒙旗のみならず、外部社会に対して常に高い関心をもち、そこで得られた情報

やアイデアを旺盛な吸収力で、意欲的に自分の創作活動に投入していくというスタンスを徹底している。

❖器用な一般化

映画「河曲馬」の撮影は、二〇一二年に河南蒙旗で行われた。この映画の原作者はツェラン・トンドゥプさんである。二〇一四年八月、河南モンゴル族自治県設立六十年周年記念のために一連の祝賀記念行事が行われ、映画「河曲馬」のDVDは、自治県の記念品として貴賓たちに贈呈された。「河曲馬」は、青海ラジオ・テレビ放送局が制作した初のチベット語映画だとされており、モンゴル語などにも翻訳され、広く観られている。同映画は、中国全土のテレビ・ラジオ・新聞・出版社を管轄する機関の国家新聞出版広電総局に、全国少数民族公益映画に指定され、全国で巡回放映された。また、二〇一三年七月三十一日、中国中央テレビCCTV映画専門チャンネルでも放映された。（【写真2】）

【写真2】

自治県設立60年周年記念の際に配布された映画「河曲馬」のDVD

こうした宣伝の効果もあり、映画「河曲馬」は、もはや河南蒙旗というローカルな文脈には収まらない存在となっている。この映画をめぐる評価はさまざまなルートを通じて行われてきた。例えば、原作者ツェラン・トンドゥプさんを追いかける形で、その河南蒙旗の自宅で取材した記事が『青海日報』で掲載されている。新聞記事の題は「河曲草原に取り残されたモンゴル族の牧歌」というものである。「取り残された」という表現からわかるように外部の人間には、河南蒙旗のモンゴル人は、モンゴル本体から外れて、気付いたらチベット高原の河曲草原に流れてきてしまったモンゴル人だ、というようにややネガティブに認識されていることが了解されよう（※1）。他方、一部のチベット族のサイトは、チベット語の映画「河曲馬」を「チベット族独自の騎馬文化を描き出したものだ」とポジティブに評価しており、そこで、河南蒙旗の人々はもはやモンゴル人ではなく、もっぱらチベット人として表象されていることがわかる（※2）。これに補足すると、「チベット化」し

た河南蒙旗の人々は、実は、周囲のチベット族から自らを弁別するための要素を多くもっている。その一つが、ソッゴに特有の名前で呼ばれる家畜である。例えば、この映画の名称になっている「河曲馬」とは、一九五〇年代に専門機関によって定められた名称である。河曲馬の主産地の一つである河南蒙旗では、河曲馬はソグ・ダ（モンゴル馬）とも呼ばれており、人々の民族的アイデンティティを表す一種のエスニックマークとなっている（シンジルト『民族の語りの文法 ――中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社、二〇〇三年）。（【写真3】）

作品をめぐって、外部でこうした様々な解釈がなされている中、ツェラン・トンドゥプさん自身にとって、河南蒙旗の人々が、取り残されてしまったモンゴル人なのか、それともチベット人なのか、あるいは「チベット化」したモンゴル人なのか、といった議論は、ほとんど問題にはならないようである。映画「河曲馬」において、主役となるのは、モンゴル人でもなく、ソグ・ダでもなく、ある一匹の黒色の馬タンナクである。作中で注目されたのは、タンナクとその飼い主や飼い主の父と息子との間に生まれた友情関係、すなわち牧畜民個人と動物個体との間にできた対面的なインデックス関係だ。その関係こそが、タンナクのベストコンディションや優秀な試合成績を保証していたのである（牧畜民と家畜のインデックス的な関係の詳細については拙論「家畜の個体性再考――河南蒙旗におけるツェタル実践」、『文化人類学』第七六巻第四号、二〇一二年を参照されたい）。

しかし、タンナクは、タンナクの名声を利用して一攫千金を夢みるあるホテル経営者に譲渡されてから生活環境が一変した。それまでの牧畜民とのインデックス的な関係が崩壊し、タンナクは、馬小屋に閉じ込められ、競走馬としての体力を作るため飼料を与えられていた。馬のためにと思って行われたこれらの努力はむしろ逆の効果を生む。タンナクは体調を崩し、成績も低下していく。そこで、ホテル経営者はタンナクにアンフェタミンを注射してまで、成績を求めた。しかしながら、試合の結果、その期待も裏切られる。このことは、賞金を稼ぐため、タンナクを個性のない道具としてしかみなさなかったホテル経営者の価値観そのものに起因しているということを作者は暗示しているように思う。ホテル経営者のもつ価値観を支えているのは、馬という種は人間の利用のために存在する、という論理だといえよう。すなわち、この価値観を共有する人間にとって、自分たちと馬との関係は主（人間）と客（動物）、所有（人間）と被所有（動物）の二項対立関係になる。この関係とは、タンナクがそれまでに経験していた牧畜民とのインデックス的な関係と全く異なる関係、シンボリックな関係である。

タンナクをめぐるこの映画は、人間と動物の関係にはインデックス的なものとシンボリックなものがあること、優勢を占める後者が現在前者にとって代わっていること、その変化のありようを具体的に描き出している。では、何がこの変化を可能にしているのか。それは、外部からの影響なのか。映画の脚本を後にツェラン・トンドゥプさんが小説として再構成した「河曲馬」においては、映画と異なり、タンナクは大型の石炭輸送車によって轢き殺されるという悲劇的な結末を迎えた。映画脚本と小説との時間的な前後関係を考慮すると、おそらくタンナクが轢き殺されるという小説の結末が本人の考えに最も忠実であろう。もし、大型の石炭輸送車が外部を表しているのであれば、上記の変化をもたらしているのは、外部の力ということになる。だが、ここでいう外部は完全に物理的な実在を意味するものだけではない。当のホテル経営者も、実は地域の出身の者であり、そのビジネスや生活の基盤も地域におかれている。

しかし、ホテル経営者の価値観は、地域の牧畜民にとって異質なものである。それは確かに、外部を表すものと言えるだろう。となると、ここでいう外部は、ハードな実在というよりも、むしろホテル経営者に体現された一種の新しい論理や価値観およびそれらに付随する新たな人間関係を意味するだろう。つまり、地域に新たに現れた人間同士の関係が、人間と動物の関係を創出しているということになるのではないか。いうまでもないが、こうした関係の変化は河南蒙旗、青海省、モンゴル、チベットといった地域や民族に限ったものではなく、中国

【写真3】 河南蒙旗の牧畜民とその愛馬

西部、あるいは中国に限らず現代の牧畜社会一般に広くみられる現象である。

これがツェラン・トンドゥプさんの作品から読み取れる意味だとすれば、彼の作品は、個別的な民族や地域的な文脈に根差しながらも、その民族や地域の固有な問題に関する具体的な記述に安住せず、常に、記述の次元を超えて、社会性や人間性といった高次の問題領域へ読者を導いていくのである。これは一般化ともいうべきプロセスである。そして、彼の作品にみられるこの一般化は、極めて器用に展開されていくからこそ、読者にとって彼の作品がフィクションではなく、自分たちが経験している日常的な現実そのものとなるのである。

❖文学と人類学の親縁性

では、ツェラン・トンドゥプさんの旺盛な吸収力の源や個別具体的な情報を器用に一般化していく力の源はいったいどこにあるのか。この点について、私は確信できないので、詮索はしたくない。しかし、確かに言えるのは、こうした能力に恵まれた彼は、研究者としても十分に認められるということだ。

まず、文学か否かといったジャンルの束縛に囚われず、周りに対して常に高い関心をもち、そこで得られた情報やアイデアを積極的に自分の創作活動に取り入れていくというツェラン・トンドゥプさんのスタンスは、既存領域の枠を超え、隣接分野も含めて外部へ常に進出し、そこでどんどん知的な刺激を吸収しようとする人類学者のスタンスに通底している。

また、彼の創作活動は、身の回りで生じている具体的な人間ドラマを静かに観察しながら、その観察のエッセンスを実際の現場にいなかった人間にもわかるような形でかみ砕いて説明し、人間一般の問題へと昇華していく、というアプローチを特徴としている。このアプローチは、個別の事例研究を通して、普遍的な問題を提示し、ミクロな観察からマクロな解釈へとジャンプしていく人類学的な一般化のアプローチと酷似している。

旺盛な吸収力を基に構想し執筆された彼の作品は、こうした一般性をもつがゆえに、地域的あるいは民族的な相違を超えて、複数の言語に翻訳され、多くの読者を獲得し、高く評価されているのではないだろうか。文学的なセンスが著しく欠如している私は、友人であるツェラン・トンドゥプさんの作品を読むことを通じて、文学と人類学の親縁性について初めて気付かされた。

（※1）
龍仁青「遺落在河曲草原上的蒙古族牧歌」『青海日報』
http://www.tibet3.com/news/content/2013-05/25/content_1148997_4.htm

（※2）
蔵語電影『河曲馬』展示独特的蔵族馬背文化『青海湖網』
http://www.amdotibet.com/html/2013-05/12526.html

チベット文学と映画制作の

SERNYA

vol.5

ツェワン・トンドゥプを読み解く

小説 ツェワン・ナムジャ「お待ちしてます」

小特集 牧畜民の社会進出

東京外国語大学
アジア・アフリカ
言語文化研究所

ISBN：978-4-86337-274-0

チベット文学研究会

チベット文学と映画制作の現在

SERNYA セルニャ

vol. 5